

旧満洲からの帰国女性の聞取調査

An interview survey on female returnees from Manchuria

松田 澄子 村瀬 桃子

Sumiko Matsuda, Toko Murase

要旨

太平洋戦争中、満洲に移民として渡った岐阜県の旧黒川開拓団は、敗戦後、集団自決をする開拓団が続出する中で、生きて帰国する道を選択する。敗戦直後の混乱の中、ソ連兵による護衛や食糧確保の見返りとして、若い未婚の女性を性の接待に出すことで団員の命を守り、比較的まとまって帰国することができた。この事実は、戦後長い間語られることがなく、犠牲となって現地で亡くなった女性を悼む乙女の碑の存在のみであった。近年、当事者の女性が語り出し、黒川村分村遺族会も乙女の碑の側に碑文を添える等、この事実を後世に残す活動を行っている。本稿は、当時のことを知る女性3名に、渡満前の村の状況、満洲での生活の様子、敗戦直後の混乱状態、性の接待、帰国するまでの様子、帰国後の生活状況、そして現在の生活及び証言活動までを取り上げ、時系列に語ってもらったことを文章化したものである。

キーワード：満洲移民 旧黒川開拓団 性の接待 乙女の碑 証言活動

はじめに

岐阜県の旧黒川開拓団は、国策により満洲に移民として渡満し、その後敗戦の憂き目に遭い、200名ほどの犠牲者を出しながらも、団員たちは命からがら帰国した。多くの開拓団が集団自決して果てたなかで、旧黒川開拓団は、生きて帰国する道を選択した。しかし、敗戦直後の現地人たちの襲撃が度重なり、食料も乏しくなると、ソ連兵に守ってもらうことと食料確保とを引き替えに、若い未婚の女性たちをソ連兵の性の接待に出し、団員の命を守った。こうして生き残った団員たちは、割合まとまって帰国することができた。

この度の調査では、渡満前の村の状況、満洲での生活の様子、敗戦直後の混乱状態、性の接待、帰国するまでの様子、帰国後の生活状況、そして現在の生活及び証言活動までを取り上げ、3人の女性たちに時系列に語ってもらった。調査時に録音したものを元にメモなども参考に、文字起こししたものである。

現在では、差別用語とされるような表現も見られるが、当事者の語りであることと、当時の状況を語る上でやむを得ないものとして了承願いたい。

旧満洲での性の接待には15名ほどの女性が駆り出されたが、そのうち4名は現地で亡くなっており、それを悼んで白川町黒川の佐久良太神社内に乙女の碑が建てられている。しかし、この碑には、建立のいきさつなど何も書かれておらず、時間の経過とともに事実が消えてしまうことを憂い、黒川村分村遺族会が中心となり、この度、乙女の碑の側に碑文を添えることとなった。スチール製の看板が立てられ、この看板には性接待の犠牲となり近年亡くなった女性の詩が書かれるとともに、黒川開拓団のいきさつ、満洲国とはいったい何だったのか等について4000字ほどの文章と地図が書かれている。この乙女の碑の碑文の除幕式が、

2018年11月18日に白川町黒川の佐久良太神社境内で行われた。その際に撮影して来た写真と現地で配布された資料を3人の聞き取り調査の報告の後に資料として載せてある。

また、性接待に出た女性が綴った「乙女の曲」という詩及び佐藤ハルエさんが満洲での生活を思い出しながら作った短歌も載せてある。

聞き取り調査 1

調査年月日 2018（H30）年3月22日（木）及び8月30日（木）
 調査対象者 佐藤ハルエさん（大正14年生 93歳）
 調査場所 佐藤ハルエさんの自宅（2回とも、郡上市高鷲町）
 聴取者 松田澄子 村瀬桃子

1. 渡満前の状況

大正14年1月生で、出身は旧佐見村（現在は白川町佐見）。祖父は、大工で明治時代に中津川に引っ越して、恵那や中津川で仕事をしていた。明治20年生の父は、20歳の時、祖父から「そんなに養蚕が好きなら、仙台で養蚕の勉強をして来い。」と言われて、仙台の養蚕学校で勉強してきた。そのため、家ではたくさんのお蚕を飼っており、家の外まで屋根を出してお蚕を飼っていた。学校へ行っても、「今日は2時間授業だ。」と言うようなことが農繁期にはよくあった。その頃になると蚕は大きくなっていて、繭になる前の忙しい時期なので、みんな学校そっちのけで帰って来て手伝った。地元の小学校の高等科を卒業して養蚕や農業を手伝っていたが、山の中でも青年学校があって、色々勉強させてもらった。冬は和裁の塾があって、けっこう塾に通った。そのときのノートを満洲に持って行って、帰国するとき持ち帰って、着物を縫ってみたりした。

家が養蚕農家だったので、父は年に1回は黒川の豊川寺にお参りに行っていた。この寺は主に養蚕に重きをおいて信仰する寺であったので。今では車に乗って行くような距離を、当時は峠越えて歩いて歩いて、お参りしていた。父から「今度は、お前たち2人でお参りして来い。」と言われて、弟と2人で峠を越えてお参りしたこともあった。

村の娘たちは、製糸工場や紡績工場にけっこう出て行った。私は、養蚕や農業が忙しいということで、そういう所へはやらしてもらえなかった。美濃加茂の古井という高山線が通る所があるが、そのグンゼや愛知県の安城や高蔵寺、恵那、中津川の方の製糸工場や紡績工場に友だちもたくさん行った。高蔵寺で働いていた友だちは、今も健在。

しかし、昭和の恐慌、経済不況により生糸の価格も暴落して、養蚕農家を続けることもできなくなり、父親が「これからは満洲だ、満洲だ。」と満洲行きを言い出した。祖母は、息子が哈爾浜で満鉄に勤めていたので、行きたがっていた。しかし、母親は「行きたくない、行きたくない。」と言っておりジレンマもあったが、結局満洲行きを決めた。だが当時、佐見では満洲へ行きたいという人は少なかった。

そんな中、昭和18年4月に黒川の人々とともに渡満。ハルエさんは、この時17歳であった。一緒に行ったのは、父母、祖父母、弟、黒川の白山神社に勤めていた叔父（父親の弟）の7人で満洲に渡った。弟は、満鉄に入りたいと言って喜んで行った。白山神社に勤めていた叔父を連れて行ったのは、残して行くとも父も祖母も心配で落ち着かないからということであったが、神社の方では、弟をさらって行ってしまったとえらく怒っていたそうである。

親戚に家も土地も、米も預けて行った。渡満ルートは、新潟港から北朝鮮の羅針を経て、列車で2泊して満洲に入った。

2. 満洲での生活

(1) 入植後

私たちは、郡上村（凌霜女塾）にいたが、そこは朝鮮系が強かったし、中国系も強かった。黒川開拓団が入った陶頼昭は、タイジン（大人）が支配しており、タイジンは、あちこちクーリー（苦力）に請負させてやっていた。開拓団が入っても個人的にはあまり影響はなかった。開拓団はタイジンと交流があったので、上手にやっってくださいよということだった。そのように、タイジンと黒川開拓団とは理解し合っていた。しかし、日本は開拓ではなく、中国人の土地を取り上げて、入植者に割り当てたのだった。

満洲では、20人くらいで1班として、土レンガで作った家で穴倉生活。灯りもなかった。そこに入らない人は、普通の土レンガの家だった。穴倉の中は、ものすごく暖かかった。ご飯を炊くのは、別の棟。ご飯は、お米はまったく食べられなくて、コーリャン（たかきび）飯だった。満洲では、粟、ひえ、コーリャン、とうもろこし、じゃがいもを食べて生きることができた。

佐見はお茶がおいしい。満洲行くときも、お茶の葉をいっぱい荷物に入れて持って行った。満洲では、お茶はないので、いいお茶でなくても摘んで送った。満洲の人たちは、お茶ではなくてお湯を飲むので。父が亡くなる前に、里帰りした時も、お茶を買って送ってやった。

(2) 敗戦直後

敗戦で、山に入って焚き物も拾えなくなって、食べ物の煮炊きには、枯れ草を刈ってきて利用するようになった。敗戦前にはコーリャンの皮、川端にあった柳の木を切って薪にして、1戸当たりどれだけと分けてもらえたが、敗戦後は中国人に「もう開拓団には、やらん。」と言われ、中国人に取られて燃料がなくなってしまった。満洲は冬でも雪はないので、草を刈ってきてコーリャン飯を炊いて食べた。

父が、叔父の嫁さんから「水田ばかりの所では、わらでご飯を炊くのだから。」と教えてもらって、草で炊くことにした。生きるために、草を刈って薪の代わりにした。しかし、山の中で育ち、木より炊いたことがないので、カマドの中も外も真っ黒になる。20人分のコーリャンご飯を炊くのに、火がぱあっと燃えない。カマドのまん中が暗くなったら、火力が弱いので棒を突っ込んで、わあーっと火を立たせて、コーリャンご飯を炊いた。最後まで、コーリャンや粟を食べて過ごした。ちっとも、まずいとも思わなかった。おなかすけば、コーリャンでも何でもおいしかった。

ここ（佐藤さん宅）の奥に、私よりも3つも4つも年上のおばあさんがいるが、その方の話によると、朝鮮で避難中に今日は仕事に行こうと妹と歩いていたら、八路軍と戦争が始まって玉が飛んで来て妹に当たってしまって、「助けてー」と悲鳴。その場で亡くなってしまい、遺体を道路の端に引き寄せておいて、収容所までまた戻って葬ってくださいと頼んだという。朝鮮では、大きな穴が掘ってあって、日本人が亡くなるとそこへ転がし込んだそうだ。着る物は少なくともちゃんと着せて、裸では葬らなかつた。そうすると、待っていた中国人が着物をはいでしまう。最期は裸でもいいが、それを待っている人たちがいたのである。私たちは、長春で最後にそのことをちょっと聞いた。

難民になっていた頃、襲撃で着る物から書く物までみんな捨てて避難したことがあった。街の方にみんなが避難してから、開拓団が整理に行った時、父が「今日は、オレは紙を見つけた。ノートの裏べったり使える。」と喜んでいた。穴倉に、父がその紙を持って来て、鉛筆やら色々拾って来て、「変体仮名を教えてやるから、書け。」と言って、張り切っていたことを思い出す。今から思うと、父はインテリだったなと。

3. 凌霜女塾

満洲の郡上村に設置された凌霜女塾で1年間、教えを受けた。私たちが行く前は、もっと平地に女塾があったが、私たちの時は、山の中に古い棟を利用した塾になっていた。

私たちの時の塾長先生は、川原壯之進という先生で、薩摩武士（鹿児島出身の意）で白く長いヒゲを生やしており、精神教育をしてもらった。川原先生は、東京の大学の学長さんとかになっていたが、弟さんが「兄さん、満洲へ行こう。満洲の方が安全だよ。」というので、満洲に来られて、凌霜女塾の塾長になってお世話をしてくださった。農業に関しては経験のない先生だったが、精神教育、女性の教育に熱心だった。この先生の弟さんが義勇隊のリーダーだったが、敗戦の混乱の中、哈爾濱で亡くなった。

女塾生は15人くらい。私たちの時も、最初は10人もいなかった。塾長の川原先生は、親でもできない教育をしてくれた。人間とは、こう生きるものだという教えで、すごい先生だった。

塾では、農業は人間としての修行、精神教育が中心だった。農業の中に精神教育をおいたのが凌霜塾の特徴。ヤギを飼って家畜の実習のようなこともした。山の中の方の塾のこととて、料理の先生はいないが、塾生同士が教えあって、かぼちゃを炊いたりした。そして塾生同士で、一緒に食事した。裁縫はなかった。仲間が互いに教え合って勉強した。

塾の先生のおかげで、ここに嫁に来ることができた。川原塾長が、一人ひとりどこに嫁にやるか考えてくれていた。親も話せないようなことを話された。開拓団が日本に帰ることになった時、先生は哈爾濱に残るということで、開拓団と分かれる時も、「人間ってこういうもんだから…こう生きるんだ。」と教えてくれた。

この凌霜女塾での教えは忘れない。この地域でも、すっかり忘れられてしまったみたいだ。何しろ、郡上の凌霜魂というのは、歴史があるし、その教えを大陸で学んだ。ここでこれだけ辛抱できたのも、その教えのおかげである。塾の先生は、人間はこう生きるんだと教えてくれた。いい教育を受けたと思っている。

4. 性の接待

性の接待は、副団長から「嫁さんは頼めんで、あんたら娘さんたち、どうか頼む。ここを守るために犠牲になってくれ。」と言われた。今でも忘れられない。「独身者だけ、嫁に行った人は頼めんでな。」ということで、私を含め独身女性の12人くらいが犠牲になった。

犠牲になった仲間で、現在生きているのは3人で、私が年長。東京のR子さんは、私よりも3つも4つも若い。時々、手紙くれますし、私の方からも出します。T子さんは、白川町内にいるが、私よりも3つくらい若い。3人は苦勞した仲間。

開拓団の中に医務室があって、菊美さんが風呂焚き（聞取調査3を参照）、ひさ子さんが洗淨係だった（聞取調査2を参照）。この2人に助けられた。薬や注射は軍医さん（衛生兵か？）が持っていて、注射したり手当の方法を教えてくれたりした。接待の期間は、昭和20年9月から2ヶ月足らず、1ヶ月半くらいだった。ソ連軍撤退の後に入ってきた八路軍は、ソ連軍のように性の接待を要求することはなかった。その後は、まあまあ平穏な生活が続いた。

女塾の川原先生は、「女はこういう問題あるけれども、ここを切り抜けて生きていくことが大事。戦争終わったら、女は犠牲になるけど、恥を忍んででも頑張れ。」と言ってくれた。

満洲にいるうちに結婚して、引き揚げて来てから黒川の奥新田に入ったB子さんが「川原先生の話してくださったことは、嫁に行く者に対するような、人間って子を産むんだぞって話してくださった。親でも言えないような教えをしてくださった。」といつも話していたが、一昨年亡くなった。

性の接待について、話そうと思ったのは、隠したって仕方がない。自分の私利私欲ではなく、みんなのためにそうしたのだから、ちっとも恥だとは思っていないから。

このような犠牲があったけれども、そのおかげで黒川開拓団はだいたい最後までまとまって帰って来ることができた。

性の接待で妊娠したのは1人で、満洲で病気で亡くなった。接待に出た人で亡くなったのは2～3人で、みな性病とチブスで引き揚げ前に満洲で亡くなった。

5. 帰国

(1) 引き揚げ

満洲にいる時は、何度死んだ方がましと思ったことか。でも、父が命は大事だものすごく強調していたので、どんなことがあっても日本に帰りたいと思った。年寄りや、発疹チブスなどでどんどん亡くなった。引き揚げて来た人は、若い人が多かった。中には年寄りもいたが、少なかった。

満洲からの引き揚げは、20人くらいのグループで帰国した。日本に帰国できたのは、昭和21年9月頃。コロ島から引揚船で博多に引き揚げた。引き揚げて来て、博多で白いおにぎりをもらった時、目が真っ白になるくらいびっくりした。それくらい、満洲ではお米に縁がなかった。苦勞して来た者には、米の尊さがよくわかった。

熱を出して、博多の病院で治療のため、1週間遅れて帰郷した。黒川開拓団は、グループによって違うが、わりとまとまって帰国した。引き揚げ者は、お金はいらなかった。中には、父親と一緒に団とは別行動した者もあり、帰国が2～3年遅れた女性もいた。

引揚船の中には、妊娠した人、いろいろな人がいた。妊娠している人への呼びかけはあったようだが、よく覚えていない。開拓団では、体を壊して船の中で1人女性が亡くなった。

私の家は、母、祖母、そして私と弟は帰国できた。父は、避難中に死亡、叔父は長春で死亡。母は、チブスに罹ったが、何とか生きて帰って来ることができた。弟は、開拓団の財政（財産）をおんぶして帰って来て、みんなで分けた。その弟も亡くなってしまったので、どれだけあったのか等、細かい話はわからない。

引き揚げて来て、郷里でも青年学校があったり、いい先生がいて色々な塾を開いて下さっていたので、和裁やら何やら色々勉強した。

(2) 結婚

私は性病をもらっていたので、岐阜に帰ってからも、ふるさと（佐見）の病院で梅毒の方を診てもらった。証明書ももらって、こちらでも注射をしてもらった。おかげで、その後は、病気も出なくなった。こちらの病院でも、そういう引揚者の治療をちゃんとしてくれた。いい先生に出会ったと思う。

梅毒がきちんと治っているという医者からの証明書を出して、見合いをした。女塾時代の先生の所へ主人が相談に行き、私との縁談話になったようだ。夫も満洲の元義勇隊員であった。この縁談を持って来てくださったのは、郡上村の女塾でずっとお世話になった日置先生で、お寺さまでもあるが、何もかもわかっていてくださっていて、「ハルエさん、ひるがのへ嫁に行ってくれるか？」と3里も4里もある私の実家まで何度も足を運んでくださった。開拓地なら、今までのように安心して行けるからと、ここに嫁いだ。

夫に接待のことを話したが、夫も苦勞しているもので、文句も言わずここに寄せてくれた。ふるさとへもかばってくれた。何もかも納得の上で結婚した。

弟も、「姉さんは普通の農家なんかには行けやせんから、そっち（ひるがの）に行った方

がええ。」と言っていた。

この先生には満洲でお世話になり、またこうしてここへ来られるよう世話をしてもらったので、何も文句はない。

(3) ひるがの開拓

夫は満洲から兵隊に行き、そして帰国後、ここに入植した。しかし、開拓地だから、何も木を切って、焼き畑して肥料の代わりにして、粟を作った。家も作り、順々に開拓地を広げていった。

満洲で生きるか死ぬかというところを通過して来たので、ここへきてからは、米がなかりと雑穀であろうと、草をたこうと、ちっとも辛いとは思わなかった。ここでの開拓、子育ても辛いとは思わなかった。

こちらは隣近所が離れているし、わりといざこざが少なかった。在所の方は、つながりがあっていざこざがあったが、ここはそういうことがなかった。今は、家が少なくなったし。

ここに来て3年くらいは、米と油（ピンに半分）は配給だった。1人当たり何キロというように担当者が道路端で、家族の人数に合わせて測ってくれた。だんだん自由に物が買えるようになったが、ここには店がなくて、峠を越えて荘川の野々俣という所まで行かないと買えなかった。そんなこと話しても、今の若い人はわからないが、食べる物が無い時代だった。ここで生きる者は、粟、コーリヤン、トウモロコシ、じゃがいもを作って、そのおかげで生きて来られた。今は、米ばかりでもったいない。おかずも買ったものになるし。でも、できる限り家にある南瓜や大根など、取れた野菜を食べている。今は、店へ行けば、何でもある時代だけでも、こういう物を食べなくてはと思っている。

私の家は土地を売っていないが、この集落でも何軒か、土地を売ると金になると言って、関とか美濃とか岐阜とかに出で行ってしまった。その土地を買った業者が杉を植えたが、年月がたつて竹みたいに伸びてしまっているのを見て、大工をしている次男（尾西在住）に「何で日本の木を使わんのか？」と聞くと、親方が「こんな日本の木を切るより、外国から半分製品になったのを輸入した方が安いからだ。」と言っていると答えたという。

今は春になって、雪がとけてこれだけだけど、私たちが入植した時は山ほどの雪があった。今は、スキーで雪をお金に換えられる時代だけど、当時は雪がじゃまになってばかりで。牛乳をしばらく出して出荷するにも、かろうじて国道まで出すのも大変、一苦労だった。すごい豪雪の時、乳かごをそりに乗せて、北濃駅まで運んだこともある。その頃は、少しくらい牛乳が悪くなっていても買ってくれたけど、今はそうはいかん。

6. 現在の生活

月に1度15～16、17人が公民館に集まって、体操したり歌を歌ったり、ゲームしたりしている。みんなこちらの人ばかりだから、満洲体験を話せる人はいない。引き揚げて来た者は、2～3人になってしまい、苦労した大陸の話ができない。向こう（満洲）でどれだけ怖い目にあって生きて来たか、その苦労がわからない。それに比べれば、ここへ来てからは辛いと思ったことはなかった。

ここで引揚者としては、98歳で最高齢のK.Sさんがいる。耳は遠いが足はしっかりしていて元気だが、連れ（友だち）がいないと言っている。息子もいるが、本人は別棟で1人で住んでいる。この人と年寄り会（デイサービス）に行く。男の人は、なかなか参加しないけど。K.Sさんは、郡上市八幡町の相生出身。ここでは、引揚者はK.Sさんと私だけ。

一昨日葬儀が済んだばかり。その方は引揚者で、旦那さんも引揚者だったが昨年亡くなっ

ている。この奥さんはまだ若いのに精神的に行き詰まってしまって、前の川へ飛び込んで亡くなった。息子さん、嫁さん、孫もいるのに・・・これからまだ生きてもらわなければならない人が、自分で死ぬというのは悲しい。病気なら、これは仕方ないが、人間命枯れるまで生きにゃならないと思う。満洲で亡くなった人たちは、性病だろうがチブスだろうが、生きたかったのに死んでしまった。私たちが性病やチブスにも罹りましたが、それでもどうにか生きて帰って来られた。何があろうとも、自然の力で。そういうのが塾の教えであり、神の教えであり、仏の教えである。ここでも以前は、そういうことを説いてくださる方があったが、今はほとんどそういうことを骨折ってくださる人がいない。今の若い人が聞いてもわからないかもしれない。

短歌や書くことが好きで、ここに来て同じような仲間がいてよかった。短歌の先生で福手きぬさんという先生もいたが、もう亡くなってしまった。短歌の塾をやってくださって、色々情報も教えてもらった。婦人会の方も引っ張ってくださった。そういう人も次々に亡くなり…私は、短歌を勉強したので、今でも本を見て、短歌を作っている。

短歌は、頭のボケ防止にいいなと。熟語でも何でも五七五につまんで。俳句は少ないが、短歌は、ずっと自分の体験を歌にしている。私は書くことが好きだから、あちこちの友だちにも手紙を書く。字は下手でも、書くことが好き。切手を10枚くらい買ってきてもらう。

今もヤギとニワトリがいるから見て来て、ストーブたいて、風呂たいて、ご飯は電気がまで炊いて…テレビばかり見るのではなく、その間に読んだり書いたりしている。何でもいいから書く。でも、だんだん耳も遠くなった。

何と言われようと、ここでしっかり生きてきたから、もういつ死んでもいいが、おかげさまで、まだ元気。足が痛くなって、富山県の砺波の病院で手術してもらい、70日も入院した。脚が曲がらないけれども、畑へ行って屈んで草を取ったり、立って仕事したりできるし・・・今でも、留守になってもヤギやニワトリがいるので、えさやりはする。私は農業については生まれついているので、ウシやヤギも飼える。

いつまで生きられるかわからないけど、集まっても昔の話をわかってくれる人もいないが、できるだけ人様の顔をみたり動いたりして生きている。

7. 若い人に伝えたいこと

こういう悲しいことあったけど、人間しっかりした精神をもてば、必ず解決する。今は金があれば…という世の中だが、そういうのはだめだ。戦争についてどんな批判があるか知らないが、自分の思いとしては、後悔はない。昔のことだが、生き方として、父の教えも凌霜塾（女塾）の教えも忘れない。凌霜塾の精神、郡上凌霜魂を大陸で教えられた。

若い人に、「満洲で、そんなことあったんか？」と思われるだろうが、忘れることはできない。

8. 旧黒川開拓団遺族会

黒川みたいに交流しているのは全国でも少ない。長野県の阿智村の記念館（満蒙開拓平和記念館）と遺族会のリーダーとの交流が色々ある。中国の陶頼昭のタイジンの子孫とも交流がある。黒川はずっと続いて、仲間をきちっと固めてくださる。白川町も骨折ってくださる。リーダーがしっかりやってくくださるので。

阿智村へ行くと、黒川は最高だと言ってくれる。一昨年、こちらの人も阿智村に行った。私たちにとっては、向こうに同士がいてくださるし、そういう気持ちになる。私も記念館ができた頃、Y子さんとお話して来ました。¹⁾ Y子さんは私の後に話しました。「大陸で生き

るために、こういう犠牲になりました。」と。Y子さんは同い年。がんで、亡くなったけど、ご主人も満洲帰りで、なかなかできた方で、元気で大垣におられる。柿を送ってくださることも。ひさ子さんの息子を養子にもらって後を継いでいる。私も一度行って、泊めてもらったことがある。そこでみんな集まって、色々話をした。

黒川は、記録もすごく多い。こんなに結束しているところはない。郡上村が一番のリーダーだと思っていたが、今は絆がなくなって、みんなバラバラになってしまった。記録もあんまり残っていないのではないか。

(文責：松田澄子)

(注記)

- 1) 2013年7月27日に、長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館での講演会で、佐藤ハルエさんとY子さんは、性の接待の話を初めて公にした。
佐藤さんは、これより前に1983年発行の『宝石』の「満州開拓団 処女たちの凄春」の中で、性の接待についても仮名ながら、話しているが、当時はあまり反響がなかった。
- 2) 2018年8月10日に、佐藤ハルエさんは、岐阜市民会館で開かれた証言集会で「性接待」のことを話した。朝日新聞2018年8月20日付けにその時の様子が載っている。
- 3) 2018年11月18日の「乙女の碑」の碑文の除幕式で、佐藤ハルエさんは、参列者の前でメモも見ず元気な張りのある声で挨拶した。2018年11月19日付の朝日新聞、岐阜新聞に除幕式の様子が載っている。

(注記：松田が加筆した。)

聞取調査2

調査年月日 2018 (H30) 年3月23日 (金) 及び2018年8月28日 (火)
調査対象者 鈴木ひさ子さん (昭和4年1月2日生 89歳)
調査場所 鈴木ひさ子さんの自宅 (2回とも、中津川市福岡町)
聞取調査者 松田澄子 村瀬桃子

1. 渡満前の状況

昭和17年3月に渡満。7人兄弟の5人目。当時、兄2人は入営中で、下の兄は昭和17年の1月に入営 (岐阜の68連隊)。

父は黒川生まれ。白川に婿に来た。黒川は、山と川ばかりで生活が苦しく、その当時の村長から満蒙開拓団の話があって、父は参加を決めた。母は反対だったが、父が行くということについて行った。なぜ満洲に行ったのか、詳細は不明。ただ、当時は国のためということであったか。

渡満の際にはその家で使っているもの、石臼、風呂桶、何でも満洲に持っていくことができた。

2. 満州での生活

陶頼昭は哈爾濱と新京の中間、鉄道で3時間で哈爾濱、新京に行けるところで、とても良いところであった。

ヤンソウ (羊草) をつなぎに入れ土で固めた煉瓦やビーズというもので作られた家に住んだ。土でできた家は温かかった。中国の人たちは塀の中に親戚同士が住み、コの字に家を作

って住んでいた。

その家は、中国の人たちを追い出して入った。ソ連に攻められ、ひどい目にあったが、私たちも加害者。加害者と被害者、どっちなのか…。

高等科2年になる時に渡満し、2年生に1年間通い、満州の学校を出た。その後、開拓団による新校舎ができた。私はそこの用務員として働いた。

3. 敗戦直後

終戦時には、日本が戦争に負けたことは全く知らなかった。しかし、サイパン島、アッツ島の玉砕は耳に入っていた。日本はそれまで負けたことはなかったので、負けるとは思わなかった。夏休みの学校で、高等科の子が「日本は負けた」、「戦争が終わった」と言っていたのを聞いた。

黒川開拓団は、本部から遠い所まで行って、中国人を追い出し、開拓していたが、だんだん治安が悪くなり、開拓団の本部近くへ集結し、手荷物だけ持って避難した。

学校に勤めていた私は、下宿をしていて母らと違う場所にいた。避難する直前、前の道を、中国人が1人行き、20～30分経つと1人行き、というような動きをしており、おかしいと思っていた。そのうちに、近くのおじいさんが、一斗缶の空き缶を叩いて「集団の襲撃がきた!」と飛んできた。このおじいさんと8歳くらいの目の悪い女の子と避難した。道路の向こうにあったコーリャン畑に2人を連れて逃げ込んだが、中国人の集団の一部に見つかり、「着てるものを脱げ」と言われた。夏で着ているのは上着とモンペだけ。私は「下着だけは許してくれ」と頼んだ。連れてきた子どもは丸裸で、おじいさんはふんどしだけになった。混乱した私は、ちょうど通りかかった副団長に泣きついたところ、「本部へ行け」と言われ、おじいさんと子どもを連れて本部へ逃げた。

その副団長の家に行ったところ、襲撃で黒山のようにになっていた。副団長は、大勢の人に叩かれながらも棒を持って向かっていった。

副団長の隣の家は、私の嫁入り（昭和25年）先の父がいた。めったに使わなかったが、満洲に行く人はみんな鉄砲を1丁ずつ持っていた。その時、私の夫の父が、鉄砲を空に向かって打った。その音で、みんな逃げていった。「日本女性は何しとる」と怒られた。

陶頼昭の本部に黒川開拓団は集結した。コーリャン、豆などが貯蔵してある倉庫があり、女・子どもはそこへ入った。当時、自決という言葉も知らなかったが「もう最期かもしれない」という話を聞いた。死ぬといっても、青酸カリも薬もない。死ぬときは、舌を噛み切って死ぬ。しかし、舌は痛くて噛み切れない。ものすごい力があるんだということを覚えている。

二人兄弟が義勇軍に行っていた家族が開拓団に来た。当時は日本刀か鉄砲か持っていた。その家は、日本刀で自決した。みんなその家の父親がとどめ刺した。そしてその兄弟も切った。

50歳を過ぎた私の母は、終戦直後の開拓団が集結した時に、男物の浴衣でリュックを作って、必要なものだけ入れて、「若い人が命を落としてはいけないので逃げ出せ」と言っていた。母の言うことを聞いて逃げ出していたらどうなっていたか。逃げ出さなくてよかったと思う。とにかくみんな離れ離れではいけないと、かたまっていた。

4. 性の接待について

(1) 経緯

終戦になる直前まで、足が悪かったり耳が聞こえないというような「あの人まで連れて行

くのか」というような障がいのある人まで、男はみんな召集された。子どもと女、弱者ばかりになった。

2メートルくらいある土塀に囲まれた本部を取り囲まれた。そのとき、徴兵される前の若い子が、2頭くらいの馬に乗って、囲まれている中を切り抜けて、陶頼昭にいるソ連兵に助けを求めに行った。

日本は鉄砲に弾を入れて1発撃つというもの、かたやソ連兵は自動小銃、すごい鉄砲を持っている。ソ連兵が駆けつけ、追い散らしてもらい、助けられた。

ここにいる限り、何かあったらソ連兵に助けをもらう。その報酬に、開拓団はソ連兵に女性の性的な提供をした。開拓団の18歳以上の未婚者。18歳で区切りをしたのは、私とその時数えて17歳だったので、(姉のY子さんが)一線引いたと思う。終戦は昭和20年の8月だが、昭和21年の何月ごろだったか…。

(2) 性病・妊娠の予防

陶頼昭の隣の松花江に日本の軍隊が一部隊いた。その部隊のアサヒさんという衛生兵がいて、その人がいろいろと知っていた。

私は、性接待をする女性たちの洗浄をしていた。衛生兵が接待所近くに医務室を作った。性病と妊娠が一番こわいので、子宮を洗浄した。接待に出た人はすぐに医務室に呼んだ。松花江の軍隊の医務室の拾い物の中に、過マンガン酸カリ(軍隊のうがい薬)を、リングルの1本の水に、ちょっと入れると真っ赤になる。それを天井からつるして、その尻にゴムホースをつけて。その先、柔らかい方を入れて子宮の中を洗う。私が洗浄していると、何か飛び出てきてびっくりしたことがある。衛生兵が、「これは『サック』という袋で、ソ連の兵隊も日本の女性から感染すると困るので予防に使っている」と教えてもらった。全然知らない時代だし、若かったし、本当にあの時、びっくりした。

(3) 姉のことなど

私の姉は、本当にやけくそになってしまった。ロシア人がウォッカを持ってきて、飲まされてアルコール中毒になってしまって、本当に苦しんだ。死ぬかと思うほど暴れまくって、出る言葉が、「ひさ子を殺して私も死ぬ」。それでみんな私に逃げろと言った。

「人身御供」、昔、学校で習ったヤマタノオロチ。ヤマタノオロチが、夜出てきて土地を荒らした。一番きれいな娘を出して以降、ヤマタノオロチは静かになって、土地の人たちもみんな生活できるようになった。小学校の時に習った。「人身御供」、人を助けるために、女が身を捧げるってことは、唐人お吉もそう。昔から、女が国を助けるとか、そういうことはよくある話だと思う。

黒川開拓団も、女性が15～6人、みんな未婚者の人が交代で出て、ソ連に守ってもらった。ソ連兵はそんなに長いこといなかった。1年2年もいなかった。

今度はその土地の者が、どこで鉄砲を仕入れてきたのか担いで同じような服を着て、治安維持をするため兵隊がソ連兵のやった通りのことをする。とてもこんな所にいられず、逃げた。

終戦になった時、支那事変の時、いろいろあった。日本の兵隊は、中国を攻めていくときに、女を見れば、みんな強姦。子孕みの大きなお腹した女の人があると、つかまえて、棒を持ってきて、みんなで押し出すと出る…そういうことをしたってことで。負けた国は、どんなことをされても何も言えない。それで、若い娘たちは、そんなことがきっとあると思うけど、みんな気をつけとれって、話された。「そんなバカな話ない」と聞いてたけど。本当に

現実になってきた。もう、とてもいられなくて…。

それからの開拓団の生活はどうなったかわからない。あとから聞くと、みんなひどい目にあってきたらしい。

5. 新京での生活

私の父も母も、終戦の年に、「熱病」（実際は疫痢か赤痢だったと思う）で亡くなった。当時は、ほとんどの子ども、年寄りも「熱病」で亡くなった。

初めのうちは、松花江の見える丘に開拓団の墓を作ったが、余裕がなくなった。冬場に亡くなった人は、初めのうちはコモをかぶせたが、土堀の隅に放っておくより仕方がない。暖かくなってきたら解けて臭かった。

私たちが陶頼昭を出たのは、6月の半ばだった。父も母も亡くなり、姉はどこかへ出るという話があったら、ついて行こうと思って、決心していた。

新京に様子を見に行く先遣隊が出た。宏之さん（現遺族会々長）の父らが先頭に立ち、新京がどんな様子か見に行くということで、私たちも連れて行ってほしいと言った。しかし、姉と私と小さい弟2人を連れて行くには、誰か頼りになる人を連れて来れば、と言われた。

姉は、性接待でボロボロになっていた。その頃、隣の熊本の開拓団が来ていて、その家族は（どんな方法かわからないが）みんな自決してしまった。

熊本の開拓団の生き残った人たちが10人くらい黒川開拓団に入ってきていた。姉は、その中でモリモト（モリなんとかいう人）に頼み、昭和21年の7月の初め、私ら3人を連れて出ていった。

開拓団にいるうちは、コーリヤン等、倉庫にあったもので、コーリヤン飯を炊いて食べたりして食事は共同で食べていた。新京に出たらそれぞれ個人で口を養わなければ生きていけない。その時に菊美さん（聞取調査3を参照）も一緒であった。姉と着物売買市場へ行って、着物を売った。新京に3か月いた。

新京では、様々な仕事をした。初めはアイスクリーム売り。新京の街は新しく、満洲に行って成金になった人の名字が町の名前になっていた（シノ町等）。

新京でも、日本の人たちは食べるに困っていた。日本の着物を集めて売るところがあるのでそこ行って買い、1枚いくらで売る、そんな仕事をした。弟たちは、燃料が何もないので、コークスを拾って来て、七輪でそれを焚いて、お粥を炊いたりして食べた。私は女中等もしていた。

私は日本人は大丈夫だ、何も性的なことはないと思って寝ていた。アイスクリームを売っていたが、ある夜、本当にくたくたで、寝こんでしまった。それまで何にも手も出されなかったが、ちょっと息苦しいと思って起きたら、北海道の人だったかが、私の上に乗ってびっくりした。それで私は次の朝、アイスクリームを買いに行っているうちに、Sさんを連れて、姉のいるところへ逃げた。

国務院、郵政省等、官庁街が、新京のダウドウダイガイをまっすぐ行くとあった。その人たちはみんな、既に引き揚げていた。軍隊の官舎もそこにあった。繁華街の人たちの話を聞くと、「何で軍隊の家族はあんなにどンドン動くのか」と思っていたら、軍隊の家族だけみんな日本へ帰った。

残った者は開拓団と、商店街の人たち。何にも知らない。それで商店街の人たちは怒っていた。そういうことを覚えている。

6. 帰国

帰ってくるときの船の中、姉が私の名前を呼ぶ。「大きな声で…」と咎めると、姉は「どこか行ってしまったらと思って」と言うが、船の中でどこも行けないのに。私が姉を頼ってきたように、姉も妹の私を頼った。

私たちがコロ（葫蘆）島から乗った巡洋艦はノットが速く、すごい船だった。それで早く博多へ着いたが、沖で病人が1人出て、10日間船の中で足止めされた。昭和21年8月1日に博多に上陸した。

お腹の大きい人もいた。妊娠している人は、全部博多で足止めで、帰さなかった。

船の中で、尿の検査があった。性病に疫病、徹底的に船の中で検査した。その検査を受けて、博多へ上陸してからも、それらしい人はみんな博多の病院に入れられ、本籍には帰さなかった。私も姉も、異常はなく、帰ってこれた。

私たちはリュック1つで帰ってきた。当時、リュックを背負ってる人を見ると、内地の人たちは「リュック背負っとる人は引揚者みたい」と言われた。

弟が3年間、中学を卒業するまで嫁に行くなど。結婚してここに来た時でも、姉が私を呼ぶ声が耳について…。結婚は（昭和）25年。結婚と同時に、現在の住所へ。

姉も帰ってきた人みんな、女性をソ連兵に差し出して、助けてきてもらったことは、誰も口に出して言わなかった。みんな結婚しなければならぬ人ばかり。そんなことは言わなかった。姉は、長野の開拓記念会館へ行って、そういうことを初めて話した。

7. 結婚後

30歳になった頃、役場から35歳までは若妻会とかそういう名目があって、若妻会の人に、配りたいものがあるから来いと。役場に行ったら、サックを配ってた。子どもをあまり作るんじゃない、産児制限ね、真っ最中。

ハンセン病、差別されてたけど、そういう人は、優先的におろせ…。そういう時期があった。私たちもその頃、どんなことをしたら子どもができないか、に興味をもった。『主婦の友』とか、そういうもんに出てきた。ドクトル・チエコという医者が、一度、産児制限の講演に来たことがあった。自分の生理の来るときは気をつけて。生理と生理の間が排卵する時で、その排卵期をはずせば子どもができない。よく勉強しよう、ってことをね。

今度生理が来るかと思って、こない。これはあやしいと思って、近くの医者へ行くと3か月になってる。生理が来ると思っても来ない。来ないと思っているうちに、3か月になってね。その頃3000円あると、優生保護法で墮胎できた。ドクトル・チエコ先生は、どんなに気をつけても、精子は、女の体の中で1週間生きてる。卵子は死ぬけど、精子は生きてる。卵子が出ると、その1週間前の精子でも、卵子に達すると子になると。そういう講演だった。気をつけてなんて言ってた。

（文責：村瀬桃子）

聞取調査3

調査年月日 2018（H30）年3月21日（水）及び2018年8月29日（水）
調査対象者 安江菊美さん（昭和9年12月15生 83歳）
調査場所 岐阜県加茂郡白川町黒川の食事処「杉の子」及び安江菊美さんの自宅
聞取調査者 松田澄子 村瀬桃子

1. 渡満前の状況

私たちは、たった13年間しか存在しなかった幻の国、満洲で5年生活した。

昭和の初め頃より黒川村は、人員過剰で自給自足の生活ができなかった。当時の村長は、県会議員も兼ねており、また県会議長まで務めた政治家だったので、県・国と歩調を合わせ、満洲に第2の黒川村を作るのだと自ら視察して来て始まったのが、黒川開拓団である。貧乏人、次・三男は満洲へ行けと言われた。兵隊には取られないということも宣伝文句だった。

150戸を募集したが、なかなか集まらなかった。全財産を処分して家族を連れて、未知の世界に入ることは容易なことではなかった。その頃、黒川の貧乏人は、汽車に乗ったことすらしない人たちだった。

黒川で85戸、黒川同様の佐見（現、白川町）にも声がけして38戸とその他を合わせて129戸、600余名が満洲に渡った。その頃は、日本各地より続々と満洲に入植。満洲全土に防波堤のように入植させられ、開拓民は日本の兵器に使われたと言っても過言ではない。私の父は、非農家の三男坊で貧乏人で、満洲行きには十分条件だった。

昭和16年3月には、まず設営班が5名、同年4月には先遣隊20名が渡満して準備を進めた。父は、先遣隊として渡満した。

昭和16年12月8日、大東亜戦争が始まる。その年の12月29日に、父が家族を迎えに帰って来て、家や屋敷の処分をしたり、持ち物の整理をしたりと慌ただしく準備していた。昭和17年の春、黒川国民学校1年生の3学期（昭和17年3月）に、家族5人揃って本隊第一陣として満洲に渡った。下関でみな船底に入れられて釜山に渡り、後は列車で、満鉄に乗り陶頼昭へ。海が荒れて、みな船酔いで大変だった。そのため船員さんたちは、バケツを持って走り回っていたように思う。上陸するまで、8時間もかかった。現地に到着するのに何泊かかったか、よく覚えていない。

2. 満洲での生活

入植地の陶頼昭に着き、「これが我が家だ。」と言われてみると、屋根、棟の低い泥の家だった。入口1つに両サイドに窓があり、二世帯が住むようになっていた。中に入ると、泥臭いような満人臭いような、昨日まで満人が住んでいた家じゃないかと思える家であった。外を見れば、地平線まで続く綺麗な畑、所々に防風林の楡の木が立っていた。まさしく日本が強制買収した場所だとすぐにわかる。私たちは、開拓者でも開墾者でもない。人様の物を取り上げて入ったという感じ。

渡満した3月でも、マイナス35～40℃だった。かまどを焚くとオンドルが暖かくて快適だった。灯りはランプで不便な点もあった。満人は、トイレ・風呂の習慣はなく、先遣隊の人たちが、裏に二世帯共同で使うように作ってくれていた。

満洲開拓と言っていたが、実際は満人の家、畑を取り上げたのだから、開拓することはない。このことは、子ども心にも感じた。10の集落に30の班、3～4軒で1つの班という構成で、百姓仕事は、班ごとの共同作業であった。1つの班に、馬4頭とクーリー（苦力）と

いう満人の働き手を使っていた。

南に松花江（大河）がゆったり流れていて、大きな赤い夕日が地平線に沈むのがとても美しく、今でも目に焼きついている。その大河の支流が団の近くを流れていて、エビ、フナ、ナマズなどの魚がたくさん釣れる。家畜は飼っているし、母たちが食料の買い物に行くこともなかった。

ゆったりした楽しい生活はいつまでも続かなかった。昭和20年に入ると、働き手を次々と兵隊に取られ、団員ねこそぎ動員で、父も昭和20年5月14日、出征して行った。異国の地で兵隊に行くということは、皆に知られたくなくて、隠れるように夜中に出発して行った。それでも翌日には、満人たちが代わる代わる「秋さ¹⁾、兵隊に行ったのか？ 本当に行ったか？」と聞いて来るようになった。父は、小さい時の不慮の事故で、片目失明していたので、兵隊に行くとは思ってもいなかった。満人たちが、「片目の秋さが兵隊に行くようでは、日本は負けるよ。」と言って来る。

働き手を失った母たちは、一所懸命に畑に出て農作業を行った。そんな頃、新京より女学生さんたちが、勤労奉仕に来てくれ、私たちも学校から一緒に草取りに出掛けた。しかし、とうてい女、子供ではできるものではなかった。治安が悪いというわけではなかったが、何となく不穏な空気が漂っていた。

3. 敗戦直後の襲撃と食料不足

昭和20年8月15日、終戦。終戦と同時に、生きるための戦争が始まった。満人たちは、手のひらを返したように強くなり、日本人は、ただただオロオロするばかり。国がなくなるといことは、大変なこと。守ってくれる国がなくなれば、当然仕返しをされる。人様の土地に入っの生活。犠牲に合うのは当然、開拓団である。

8月17日には、隣の来民開拓団の集団自決を知る。それからは、自分たちが作った野菜を取りに畑に出るのもままならず、親しくして来た王さんが、「食べる物あるか？」と野菜を持って来てくれた。

8月20日頃から、ロスケの姿を見るようになる。ロスケとは、ソ連の囚人を兵隊にした人たちで、3人くらいで組んで銃を持って、女とみれば襲って来る。男がいろいろ、子どもがいろいろお構いなし。母たちは、豚小屋の藁の中に隠れる。父親の前で、兄弟の前で銃を突きつけて、次々襲って行く。

そのうちに満人の物取りの匪賊化した集団が来るようになる。奥地の集落から、次々に何百人で1ヶ所の集落を襲って来る。抵抗すれば殺される、物を持っていれば殺される、命からがら逃げるだけ。この襲撃団は、日本に強制買収され、無理に土地や家を取られた人たちの集団だと思う。ある集落では、抵抗したために5人の犠牲者が出た。その集落の人達が、旧本部に逃げて来る姿にぞっとした。全員が白鉢巻き姿で、足をひきずった人、肩を借りて歩く人、子どもをおんぶして、片手に子どもを引きずった人、モンペを引き裂かれた人。私の友人は、この時、腰を叩かれて一生難儀をしている。

それを見た夜から、いつでも飛び出せる姿で寝る。母は刀を、私は短刀を、妹や弟は目つぶしの灰を枕元に置いて寝る。人を殺めるものではない。襲われたら、自分たちで使うもの（自決用）である。武装解除で出すべき刃物であったが、母子家庭では出せず、隠し持っていたのである。

仲良くしていた王さんが、「今度は、あんた達の家が襲撃を受けるから、子どもの着物を持って来い。」と言ってくれた。その時、刃物は土に埋めた。

開拓団の最後の襲撃は、9月23日だった。早朝より人が集まる、見る見るうちに200人、

300人と家を取り囲まれて、母が「襲撃だ。」と言って卵1個ずつ飲ませてくれた。掛け声と同時に、小さな窓からレンガやドミーズの欠片を投げ込んで来る。布団をかぶり母子6人が当たらないようにしていたら、裏の窓を破りドツと入って来る。その風圧で、一気に外に飛び出す。もう隣りも、その隣りも入られて、物を担いで走る。物を奪い合っている人、長柄のカマを振り回す人もいた。すさまじい光景だった。表で震えていると、「女、子どもは旧本部に逃げろ。」と言って、治安維持会の人々が逃がしてくれた。満人の人たちだと思う。

その夜から大きな穀物倉庫のコンクリートの上にコモを敷き、コモをかぶり、何百人の集団生活。(400名～500名くらいか?)男も子どもも皆一緒。お互い肌と肌を触れ合って、その温もりで寝た。そこへ毎晩のように、銃を持ったロスケが入って来る。娘さんたちは、みな坊主にして頭や顔に炭を塗り、お婆さんたちに抱かれて寝ていた。娘たちをみんなかばった。

大集団で、食事也大変だけど、トイレも大変。長い穴を掘り、男女の境はコモ一枚吊しただけ。それが寒い時で、便がシャーベット状に凍って、ピラミッド状に固まる。糞当番があり、男性の方が、金棒で叩き落とす。

食料も乏しくなり、飢えと寒さとシラミの大群に襲われる。頭に黒いシラミ、頭をかくとパラパラとシラミが落ちる。体には白いシラミ、衣類の縫い目にぎっしりと卵を産みつけており、縫い目の中に頭を入れて綺麗に並んでいる。少しばかり手で潰しても死なない。

備蓄されていた食料も少なくなる。塩もなくなる。皮付きのコーリヤン(3年前の馬の飼料)を食べるが、口の中でモコモコするだけで喉を通らない。

団長さんは兵隊に行っていたので、副団長さんが団を守っていた。副団長さんはじめ幹部の方数人が、満人の役人に引っ張られて行ったが、3、4日で帰って来た。すぐ後に大きな火の玉が北の方に飛んだ。友人とその方に見に行った。日本警察の方と外の人5人くらいが殺され、野犬に食いちぎられて、首だけが転がっていた。若い男の方の心もすさんで来る。「もう自決だ。」と騒ぎたてる。母に、3日たったら集団自決だと告げられる。

その頃、炊事場に盗みに入る人も出てくる。満人に子どもを預ける人も出て来る。お乳が出なくなり自分の子どもを殺める者。集団自決だと言っている人が、自分勝手なことをしていた。黒川開拓団には、3人の残留孤児も出た。

栄養失調とシラミの大群で発疹チブスが流行し、1日に3人～5人も亡くなる。1週間の間に妹が弟がと3人亡くなってしまった。きょうだいは5人のうち2人しか残らなかった。従兄も4人亡くなった。悲しいことすらなく、みな放心状態。最初のうちは、亡くなった人をコモに巻いて、どこかに葬るが、その死人も着る物をはぎ取られたり、野犬に食いちぎられたかかも知れない。コモもなくなり、本部の片隅に大きな穴を掘り、そのまま放り込む。何しろ何百人と死んでいく。

母が、「自分で殺めることなく、亡くなってくれて助かった。」と言っていた。涙なんて出ない。自分が生きるだけで精いっぱい。悲しいという感情はない。

寒さも厳しくなり、コンクリートの上では、生活できず、旧本部の庭に穴を掘り、学校の廃材で屋根を作り、生活をした。しかし、中はシケシケで湿気が多かったが、暖かった。

4. 性の接待

団長は兵隊に取られ、副団長が団を守っていた。食料も乏しくなるし満人たちの襲撃やソ連兵の女性への暴行に耐えかね、陶頼昭の駅の近くに駐屯していたソ連軍将校に助けを求めた。治安維持と食料を分けてもらう代わりに見返りを要求され、若い娘たちを性の接待に出すこととなった。副団長が、20歳前後の娘たち15人ほどに、「塩、食べ物がないから…ソ連兵相手の接待に出てくれ。」と頼んだ。集団自決から団員を守り、生きて帰るには、この方

法しかなかったと思う。この実態については、性の接待に出た娘さんの声が昭和58年と平成18年の『宝石』²⁾と『女性自身』³⁾に載った。当時、性病や発疹チブスで4人の娘さんが満洲で亡くなっている。これらの娘さんのおかげで、自決はもちろんなく、男女ともに働きに出ることができた。私は、ドラム缶での風呂焚きを担当した。久しぶりに風呂に入ると喜んでいたら、「自分が入る風呂ではない。私たちを助けるためにソ連兵の所に行っているお姉さんたちが入る風呂だから、一生懸命心を込めて焚け。」と母親に怒られた。

妹が耳の後ろにケガをして、医務室に行ったら、衝立の裏で娘さんたちが消毒をしていた。このことは、一切タブーで去年まで誰にも話さなかった。藤井三郎さん（現遺族会々長の藤井宏之さんの父）は、娘たちに接待を頼む接待係となって、「自分に娘はいないけど、嫌な役をもらった。」と言っていた。

性の接待から帰った娘たちの消毒に使った薬は、うがい薬だった。これは、よその開拓団に行こうとして混乱の中で行けず、黒川開拓団に合流した衛生兵が持っていたものだった。消毒係は、Y子さんの妹のひさ子さんだった。

生きるだけで精いっぱい。生きていられるのは、お姉さんたちのおかげだということも十分わかっていた。

性の接待は、昭和20年9月末頃から始まって、1ヶ月半くらい続いた。翌21年にはソ連は撤退。ソ連兵は性の接待の他は、物取りなどの悪いことはしなかった。

5. 新京での生活

昭和21年5月、設営班が20名ほどで新京に出る際、私たち母子も連れて行ってもらった。新京まで出て、国務院の官舎に入って、3ヶ月生活をした。国務院の官舎の人たちは、すでに引き揚げていたようだった。共同生活で、男女、大人も子どもも一律の食費で、母子3人には厳しく、毎日行商に出歩いた。みんな男も女も働きに出た。ばくだん豆(油で炒った大豆)、大福餅、パンなどを仕入れて、箱を首から提げて売り歩いた。新京の南湖の近くの行楽地や公園に行って売り歩いた。売れなくて食費の払えない時は、食事抜きだった。それでも、商品には手をつけたことはなかった。

歩き廻っている時、道端でうめき声を出して倒れている人、手を合わせて座っている人、全裸の死体の山を3つくらい見たが、あれっと思うくらいで、恐ろしくも怖くもなく、可哀想とも思えない。自分たちも捨て身だった。この頃に自分の口は自分で養う、人には頼ってはいけない、頼らないということを実感したが、小学6年生の時である。

6. 開拓団の引き揚げ

開拓団には引き揚げが知らされず、取り残された。軍人や役職幹部は、終戦前後に南下して引き揚げた。

ある3人の若者が、日本政府に引き揚げを頼むために朝鮮に脱出し日本にたどり着いた。³⁾しかし、開拓に出た人は帰国しなくてよいと、日本政府に見捨てられた。ところが、GHQは、「開拓に出た人は帰すように。」ということで、「大きな港はダメだから小さなコロ島に船を廻すから。」と言ってきて、アメリカの貨物船で引き揚げることができた。

昭和21年8月末、私たちは、無天蓋車に乗せられ、着の身着のまま南下。雨が降るとずぶぬれになった。列車が止まると衝撃を受ける。取られる物は何もない。のどがかわくと列車から降りて、水たまりに口をつけて妹と2人で飲んだ。よく見ると、馬の足跡に溜まった水で、ボウフラがピンピンと跳ねている。腹痛もよく起こさなかった。列車が止まる度に、皆トイレに降りる。男の人や子どもは列車のすぐ横で済ませるが、娘さんやお母さんたちは

列車の下に入って用を足す。そこでなぜか列車が1回だけガシャンと動く。そうすると、そこで命を落とす人が出る。男の人2人で、その轢かれた人を引きずり出して、ポイッと草むらに捨てて、列車は走り出す。

昭和21年9月4日、コロ島よりアメリカの貨物船に乗り、帰国することになった。次の便は、昭和21年9月19日か20日あたりで、博多港に入港。

日本海の真ん中で日本国歌を歌ってよいと言われたり、演芸会もあったが、それより何より風呂に入れてもらったことが嬉しかった。何と1年ぶりの風呂。そして、佐世保に入港した。よく病気になるはずに生きて帰って来られたと思う。佐世保港で、DDTの粉を頭から体に真っ白になるほどかけてもらおうと、一気にシラミが死んだ。これもアメリカのお陰である。検便もしたが、1本のガラス棒で2人分（両端を使用）だった。船の中で亡くなった人は水葬であった。船の中に妊婦がいたかどうかは、よくわからない。黒川開拓団は、すぐに洗淨したから、妊娠する人はいなかった。

私たちは、日本政府に武器にされても、見捨てられても、当時は敵国であるはずのアメリカに助けられ、故郷にシラミを持ち込むことがなく助かった。母たちは、激動の時代で生理は止まり、日本に帰国しても生活が安定するまで無くて助かったと言っていた。昭和21年9月、私が6年生の時、黒川に帰って来た。衣食住何もない者には、生きるために働くのが大変だった。満洲で捨て身で働いた時も辛かったけれども気楽だった。日本に帰り、生きるために働くことは厳しかった。

7. 帰国

帰国後は、父の実家にお世話になった。汚らしい私たちに布団を敷いて寝かせてくれた。1年ぶりに、足を伸ばして布団の中で寝る。嬉しかった。一緒に帰って来た人の中には、親戚があっても畳の上には上げてもらえず、土間にムシロを敷いて寝たという人もいる。食糧難で、帰国者の住むところは公民館。

9尺四角の小屋を作ってもらい、母子3人の生活が始まる。藁で草履作り、筵作り、縄ない等をした。1枚の布団で3人（母と子ども2人）が寝た。白いご飯を炊いて食べたのが、忘れられない。草履は本家から1足ずつもらったがすぐにだめになるので、草履も自分たちで作った。

一応、学校に籍は置いたが、1年半学校には行っていない。母が担ぎ屋をして生計を立てた。黒川から白川口駅まで16キロの道を早朝より炭を背負って歩いて、そこから電車に乗り名古屋行き、駅の裏の闇市で物々交換、野菜や米と交換した。妹と2人でお百姓さん宅に、売り歩く。野菜と交換したり、お金をもらったりだった。時には、母がサンマを1箱仕入れて来る。その当時は、サンマ1匹を5切～6切に切って食べる時代で、一家族に1匹あれば十分。夕方、サンマを売り歩くが、なかなか売れない。ある家のおばあさんがサンマ1箱全部買ってくれた。「夕方、そんな物売り歩いていても暗くなる。私が、全部買ってあげる。」と言ってくれた。とても嬉しかった。あんな嬉しいことはなかった。このおばあさんは、普通の百姓だったが、黒川に疎開して来ていた人だった。配給でザラメが1斗缶で来た。これも食料を仕入れるために売った。

学校へは行けなかったが、小6の卒業式のちょっと前位から、やっと通えるようになった。普段は、どろどろのおかゆのようなものを食べていたから、お弁当を持って行けなかった。それで、ジャガイモをゆでて団子にして持って行った。「そんなもん食ってんのか？」と言われるくらいひどい生活だった。満洲から帰って来てすぐには、「乞食」と言われた。最低の生活をしていたので、百姓家の子だくさんのおばさんに「あそこは、貧乏だから。」と、

米泥棒の汚名をきせられたこともあった。このことは、しばらく知らなかったが、いところから後で聞いて知った。貧乏人が大そうバカにされた時代だった。

昭和23年に家を建てようと、7坪の家を1万7千円で大工さんをお願いした。しかし、建てる土地がなく、あちこち借りるように頼んで回るが、当時、野原も開拓して野菜を作る時代。ましてや、私たちのような父のいない家庭は、借りられず難儀した。そして、大工小屋の置代として、2千円大工さんに取られて悲しかった。

昭和23年5月、父親がシベリアから帰ってきたので、それからは負担が少なくなった。だんだん学校にも行けるようになった。貧乏のどん底の生活をしたので、怖いものはない。

昭和16年当時、満洲移民には渡航費として1軒につき3000円が国から出るはずだった。しかし、もらった人はいない。村長が村を潤すために使った。多少、どこかに入ったかもしれないが。満洲から帰国するという情報が入ると、村長は証拠書類を役場で燃やしてしまった。渡航費が残っていたら、少しでも接待に出た娘さんたちにあげてほしかった。村の分村計画で行ったわけで、行きたくて行ったんじゃない。その責任を当時の村長は逃げて取らなかった。開拓団の団長は、土地や家を売らずに残して行った。他の人は、みんな処分して行ったのに。

いったん戦争になれば、男も女も関係なく弱い者が犠牲になる。私たちは、日本の兵器として使われたのも同然。国境の防波堤として、開拓団、義勇軍が利用され、帰ることさえ許されない。中には集団自決して果てた人々もいる。日本政府は、いったい何を考えていたのか。

7. 現在…証言活動

遺族会々長の藤井宏之さんも協力的で、娘さんたちのおかげで今日まで黒川が続いた。平井美帆さんが取材に来た時に、T子さん、ハルエさんのところをまわった。後に週刊誌『女性自身』に発表した。

その前には、佐藤ハルエさんがルポライターの槇かほる（林郁）さんに話した内容が、『宝石』（週刊誌）に「満州開拓団・処女たちの凄春」というタイトルで出版されたが、当時はあまり反響がなかった。

Y子さんが亡くなる前に、彼女から「とにかくあの時のことを話してくれんか？ 知らない人もいるから。苦労したことを話して。」と頼まれた。妹さんのひさ子さんもお姉さんに頼まれたと言っている。それから遺族会々長の宏之さんも、被害女性たちに寄り添い、女性たちの証言活動などにも取り組むようになった。遺族会も2世3世の人たちばかりになった。慰霊祭をやる所は少なくなったが、黒川は2年に1度だが続けてやっている。

Y子さんは生前、女性たちだけで中国で亡くなった娘たちの慰霊をしたいと言ったが、男性たちからは、団として慰霊祭をやっているのだから、そんなことやらなくてもいいと言われてしまった。しかし、私と赤河の人とでやった。Y子さんは、妹のひさ子さんの分だけでなく、ひさ子さんの同級生の分まで接待に出た。とても利口で、女性たちのリーダー役だった。もう2年早かったら、Y子さんにも会えたのに（今回の調査が遅かったという意味）。

接待のことを話すようになって、あちこちから話ができるようになった。今年も3ヶ所で話をする予定、そのうち1つはすでに名古屋で話をした（2018年6月30日）。去年は美濃加茂で話をした。

こんな悲惨なことは、もうたくさん。2度と戦争を起こしてはならぬ。ひと度、戦争が起これば、男も女も弱い者が犠牲になる。権力者や官僚は、決して犠牲にはならない。

（文責：松田澄子）

(注記)

- 1) 安江菊美さんの父、秋三郎さんのこと。
- 2) 槇かほる「満洲開拓団・処女たちの凄春」『宝石』 光文社 1983年9月
- 3) 平井美帆「満洲開拓団 いま明かされる悲劇 忘れたくないあの凌辱の日々 忘れさせない乙女たちの哀咽」『女性自身』NO.2290 1983年9月20日
- 4) ポール・丸山著・高作自子訳『満洲 奇跡の脱出』白鷺舎 2011年
NHK特集でドラマ「どこにもない国」として、2018年3月24日（前編）と3月31日（後編）に放送された。

(注記：松田が加筆した。)

参考資料

1. 『性接待』沈黙破る女たち』朝日新聞 2018年8月20日
2. 「封印された記憶 岐阜・満洲開拓団の悲劇」岐阜新聞 2018年8月20日～9月1日（12回連載）
3. 「性接待伏せられた記憶 満蒙開拓団の悲劇 犠牲の上の次世代 寄り添い伝えねば」朝日新聞 2018年10月20日

(参考資料：松田が加筆した。)



2018年11月18日（撮影：松田澄子）

「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」『生活文化研究所報告』第45号（2018年発行）の訂正

- ①P.30 下から5行目（訂正前）9ヶ月にわたって被害を受け続けた。
（訂正後）約1ヶ月半にわたって被害を受け続けた。
- ②P.31 上から14行目（訂正前）夫は元青少年義勇軍の人で満洲からの引揚者である。
（訂正後）夫は元青少年義勇軍の人で満洲から南方に出征して引き揚げてきた人である。

乙女の曲

十六才の春の日に 乙女の夢を載せた汽車 胸はずませて行く大地 陶頼昭に花と咲く
大河の如き松花江 岸辺にそびえる青柳 夕日に染まる地平線 輝く空に星一つ
広き広曠の大陸は 日本の国土と信じてた 食料増産国のため 朝日と共に働きぬ
何も知らない開拓の村に聞こえる敗戦はうそだと思う その日から不穏な空気強くなる
思えば他国のその土地に侵略したる開拓団 王道国土の夢を見て過ごした日々が恥かしい
栄華の道は短かくて 奈落の底に引きこまれ 神の怒りか 天の罰受けて 悲しく日はくれる
隣の村のウジャジャンは全員自決で散り果てぬ あしたは我が身の消える日か 両手合せて
死ぬを待つ
乙女の命と引替えに 村の安全守るため 若き娘の人柱捧げて生きる開拓団
あゝ忘れぬ あの時の思い出語る乙女達 尊き命捧げたるあの子の悲しみ誰が知る
蒼のままに散る定め 泣いて明かした満洲の本部の窓に残る月 今尚癒えぬ心傷
傷付き帰る小鳥達 羽根を休める場所もなく 冷たき眼身に受けて 夜空に祈る幸せを
守りし命長らえて 祖国の土に五十年 あの子も今は六十路坂 変らぬものは心だけ
次に生れるその時は 平和の国に生まれたい 愛を育て慈しみ花咲く青春綴りたい
消してはならぬ灯を この世に命ある限り語りて伝へよ 戦争の悲惨さ辛さ哀れさを
残り少ない老いの身が 思い出つゝこの歌は せめてこの世の慰めに 涙で歌う哀唱歌
誰が手向けた 白ユリの花一輪に 微笑みて静かに佇む乙女の碑 可憐な姿いじらしい
誰が悪い訳でなく 生まれた時が運命の別れとなったあの時代 帰らぬ青春惜しむだけ
平和の国の幸せを 世界の友に知らせたい 悔いなき人生永えに続けと祈る乙女会
異国に眠るあの娘等の思いを胸に この歌を口ずさみつゝ、老いて行く 諸天よ守れ幸の日を
諸天よ守れ幸せを

(平成2年4月26日作詩 性接待を体験した女性の詩)

佐藤ハルエさんの短歌

かく迄も我が身をころせし世なりかな戦死^{ゆき}にし叔父の便り悲しき
ハルピンの街は昔に変わらじとうあの石垣踏める日あるや
ふとんとも笠とも成りぬ麻袋暮運の難民の日を
映像にうつし出されし難民の姿を見れば杳^{とお}き日還る
大陸の思いを秘めし一枚の赤き晴着の今も無事なり
此の空は日本の空につづきしに泣いて仰ぎぬ凍てつく曠野に
日本への希に惹かれ歩みし子今は父と成り母と成り来て
夏草の丈なすよもぎ刈る度にしとねと成せし日の思わるゝ
北海道行きたき夢の再現と大陸に果てたる父ぞ幸あらむ
リュック負い追われし夢の幾度ぞ三十余年の年経たれども
松花江見渡す岡に納め来ぬ父祖母の霊如何におわすや
松花江沈む夕日赤さをば父とたゝえし思忘れじ
ボウフラをかきわけてすくう雨水も飢えし我には甘露なるかな
昨日まで我が乗り降りし停車場今日ソ聯兵の満あふれたり
同志等の訪中の報涙しぬ我尋ぬる日を祈りて止まず
死なせてと叔父の言葉の悲しさよ負いて歩めば雨のはげしき
ひさびさの出会いは涙に言葉なし苦難ともにす同志にあれば
大陸に残こしし人の霊かえる思ぞしぬる黄砂まいきて
丈のびしよもぎ刈^(ママ)りは野宿せし難民の日のよみがえり来て
米食えの運動日ごとにはげしかり我銀飯に泣きし日思う
生きがいを蚕にかけし父なるに戦は大陸に父を追いやり

いつまでも平和がつつきますように

満州国と「五族協和」「王道楽土」とは

満州国は、満州事変を機に生まれ、太平洋戦争終結にともない消滅した「国体」である。存続期間は、昭和7年(1932)3月1日から昭和20年8月18日までの13年5ヶ月。現在の遼寧省、吉林省、黒竜江省の東北三省に内蒙の東北部を加えたエリアにあたる。面積は、約23万3400km²、今の日本のおよそ3倍で、北海道と同じ湿潤大陸性気候であり、夏は暑く、冬は長く厳しく長く、国旗は黄色地の左肩に赤、青、白、黒の横線を記した「新五色旗」、首都は新京(現在の長春)、国是は「五族協和」「王道楽土」日本人、漢人、満州人、朝鮮人、蒙古人の五族が協和しあい、儒教の仁で統治する「王道」によって、理想の国として楽土を築こうというスローガンである。

しかし、現実には日本の武力侵略であり、傀儡国家を正当化するための大義名分に過ぎなかった。入植地は武力を背景とした強制接収であり、一部を除き「開拓」とは名ばかりの奴隷地であり、そこは協和すべき人たちが直前まで住んでいた家屋であった。

関東軍は自国民を守る軍隊ではなかったのか

日露戦争でロシアを倒した日本は、長春から旅順を結ぶ東清鉄道南支線(後の満州鉄道)を譲り受け、鉄道1kmごとに15名以下の守備兵を配置する権利を認めさせた。兵の総計は2万4400人以下であった。その後ソ連軍の脅威が認識されたことなどにより関東軍は漸次増強され、1937年の日中戦争勃発後は、続々と中国本土に兵力を投入し、1941年には一時的に関東軍は74万人以上に達した。太平洋戦争の状況が悪化した1943年以降、重点は東南アジア(南方方面)に移り、関東軍は戦力を抽出・転用された。その埋め合わせに1945年になると在留邦人及び開拓移民を対象にいわゆる「根こそぎ動員」で25万人を召集し、7月末までに兵員78万名、飛行機230機をそろえた。だがこれらの部隊は「強子の虎」で、練度、装備、士気などあらゆる面で以前よりはるかに劣っており、満州防衛に必要な戦力量には至っていなかった。その実力を知る関東軍首脳は、ソ連軍侵襲の場合には大連～新京～図們江を結ぶ南側だけを防衛することにした。北部満州、西部満州の実際の放棄策であり、関東軍はそこに居住する開拓団には知らせなかったし、疎開させようとしなかった。1945年8月9日、ソ連は日ソ中立条約を一方的に破棄し対日参戦、満州に侵襲してきたソ連軍に対し、10日大本営は朝鮮防衛と司令部の移転を命じた。14日、関東軍司令部は通化に移転。これによって関東軍は「開拓移民を見捨てて逃げ出した」と後に非難されることとなった。圧倒的な兵力と火力を持つソ連軍は、猛烈な勢いで満州の中枢部を攻撃し続け関東軍は後退、そして敗戦。守るべき関東軍がいなくなった開拓民は、相次ぐ「兵隊による略奪・暴行にさらに苦難にさらされた。地方の開拓民だけでなく新京などにいた商人や一般人さえも略奪の被害は知られず取り残された。このことが多くの悲劇を生む要因となった。

満蒙開拓の苦難と実態とは

当初の目的は、農村恐慌に陥く内地農村の救済と開拓民に満州国の治安維持と対ソ連戦に備える屯田兵の役割を授けさせることである。移民数は全国では約27万人とも32万人とも言われている。最も多いのが長野県37,859人、岐阜県は7番目で12,090人。入植地の6割は、漢人や朝鮮人が開墾した土地を強制的に安く買い上げたものだった。多くの開拓団はソ連(ロシア)国境沿いに配置され、満州の権益を争うソ連や、抗日勢力に対して「人の盾」とする目的があったとされる。昭和20年満州にも根こそぎ動員態勢が敷かれ25万人が召集される。男手を奪われた開拓村に8月9日突如のソ連軍が侵襲、女子供は避難行の過程で病氣や戦禍、地元民による襲撃、そして集団自決により8万人が死亡、1万人の残留孤児や残留婦人を後に、日本へ帰国できた者は11万人余りだったと言われる。



戦後七十三年が経過した今、私たちの平穏で幸せな暮らしは、黒川開拓団を救ってくれた真実たちの奪われた青春の犠牲の上に得られたものであることを、あらためて深く胸に刻みます。
「二度と繰り返してはならない悲劇」私たちは後世に黒川開拓団の史実を正しく伝えるとともに、世界からあらゆる紛争、内戦、戦争が無くなるよう平和の大切さを伝えていきます。

平成二十年十一月十八日 旧満州黒川開拓団黒川分村遺族会

生きて日本へ帰ることを決断した。
しかし、充分な食糧が足りぬ中、食糧不足による栄養不足と発疹子ブスによって、弱い子供、老人たちが次々と亡くなっていった。翌昭和二十一年五月、情報収集のため出発した先遣隊が戻らないまま、八月十三日引き揚げが始まっているとの情報を得た本隊は、陶頼昭を離れ、松花江に架かる鉄橋が落とされたため、雨の中を歩き通し一晩野宿して松花江を船で渡ることに出来た。そして更に線路沿いを歩き続け、やっとの思いで徳恵駅に辿り着き、新京現長官(行)の汽車に乗ることが出来た。この間、四泊五日の野宿、強行軍の逃避行は人間としての弱さ、限界は頂点に達した。その後、新京では第一陣が昭和二十一年八月に出発、第二陣は難民として九月に出発し、胡薩島より博多港に向けて出発。その年の十月七日の生還者もすべて引き揚げ終了となった。陶頼昭を出発して郷里の土を踏む迄の間一か月余りに二十七人の犠牲者を出した。黒川開拓団は八百八十二人の内二百八人が死亡、残留孤児三人を中国に残し、再び故郷の土を踏んだのは四百五十一人、黒川開拓団の五ヶ年に及ぶ長い旅は終わった。
一部は黒川開拓団史を参照

乙女の碑

乙女の命を引き替えて 國の自決を止める為 吾等娘の人柱 捧げて守る開拓団
次に生れぬもの時は 平和の國に産まれたい 愛を育て慈しめ花咲く青春誇りたい

(「開拓」を築かれた女性の碑(乙女の碑)より)

『私たちがこれほど辛く悲しい思いをしたが、私らの犠牲で帰ってこれた
この土地は算(は)算(は)欲(ほ)く』 (「開拓」を築かれた女性の碑より)

根こそぎ動員で男たちを失った黒川開拓団は、子供、老人、女性たちだけで団を守っていた。しかし、昭和二十年八月の敗戦ととも、その生活は一変してしまふた。

日本の敗戦を知った現地住民の一首鐘起と、連軍の強誘と略奪に残された団員らは幾度となく怯えた。食料も不足していた。近くの開拓団は全員自決に追い込まれたこの悲報も届き、いさう追い詰められた黒川開拓団にも異動自決やむなしの声があがった。生きるか死ぬかを選択させられた団幹部は、生き抜くことを選んだ。

しかしそれは、陶器砲撃に駐留していた連の將校に強誘を依頼しその見返りとして將校を接待するところという苦しい決断であった。幹部は歳で十八歳以上の未婚の女性たち十五人を集め、「兵隊さんと」行っている人の奥さん方には頼めんで、どうが頼むと、連軍將校に対する「接待役」を強いた。

女性たちは逃げたが、団全体の生死が関わる事態に嫌だとは言えず、交代で連軍將校の相手させられた。連軍の駐留した十一月頃まで「接待」は続いた。女性たちは、性別や年齢を問わずへの観察を防ぐため、医師監督「手配」を受けた。

しかし、充分な医師監督が無いために感染した四人が現地で引き揚げの途中で次々と亡くなってしまった。生きて帰れた女性たちも日本への引き揚げ後も、恐怖は脳裡に焼きつき、そのうえ口痛もされた…。そしてこのことは戦後長く語り継がれることにはなかった。

昭和五十六年、遺族や元団員による慰霊団が旧満州を戦後初めて訪れ、「接待」の犠牲になった現地への命を還した女性四人を慰霊し、この路が持ち上がり、翌年三月十四日遺族会の浮財で「乙女の碑」を建立除幕された。当時「犠牲」になった女性や家族の思いもあり、碑文を八ヶ岳に建てさせた。あれから二十六年がたち、私たちは後世に史実を伝えるため、「乙女の碑」建立をへんげ、「乙女」を築いた。

黒川開拓団とは

昭和十一年八月、広田弘毅内閣は「滿州農業移民百万戸移住計画」を重要国策として決定、昭和十二年以降二十年計画百万戸五百万人の日本農業移民の大量送出計画を策定した。そして昭和十三年には分村移民方式を導入、変形している農村部へ押し進めた。

昭和十四年、当時黒川村村長は県議会議員も兼ねていた藤井伸一氏であった。村の総面積の九割を山林が占め、畑せた段々畑と傾斜の強い田圃で米、麦と麻織を主体とした農業は、村全体の食糧自給に不足し、世帯およそ八百、人口四千弱のこの貧弱な村の将来を憂いた。藤井氏はかつて県議会議員も務めた政治家でもあったことからのいち早く、開拓の方向を切り、多少でも有利に村の前途を渡せん、県が推進する八百戸の満州移民計画にのこり、黒川村に五百戸の分村計画を立て推し進めようとした。

昭和十五年十一月、移民目標達成を前提として四人が現地へ扶余県陶器砲撃を視察した。その後も村では、毎晩のように満州移民計画の会合が開かれたが、目標戸数には程遠い八十五戸がやっとであった。そのため当時、経済状態が同じようであった佐見村へも働きかけて佐見村で三十八戸、その他で八戸出来、総計百二十九戸、総数六百余人の満州開拓移民団が結成された。昭和十六年三月、黒川村として設営班五人を組織し現地設営に務め切る。猟銃、刀を所持して陶器砲へ到着したが現地の買収は終わっていない。満州開拓移民局などと交渉し、ようやく四月三日現地入足を踏み入れることが出来た。その連絡を受けて四月十七日先遣隊として二十人が出陣した。

その後、昭和十七年三月、本隊第一陣、二百十七人、昭和十八年本隊第二陣、昭和十九年三月本隊第三陣が出陣。黒川開拓団として体制が整ったのはこの年の四月であった。

入植地陶器砲は、作物は良く育つ大変肥沃な土地であった。しかしすでに開墾してある土地、住まいを現地住民から安く買い上げ、それは半ば強制的に買い上げたものだった。そのため開拓団は侵略者と見なされ反発抗日ゲリラの襲撃対象とされた。

黒川開拓団は現地中自人の言葉を覚えて友好的な関係づくりを目指していたが、昭和二十年に入ると、根こそぎ動員で主力の男たちが召集されたためか、不穏な空気が周辺に漂い始めていた。八月九日連が満州へ侵攻してきた。そして敵戦、武器を持たない開拓団は恐怖に怯えた。黒川開拓団は旧本郷と本部の二か所に集まり集団生活を始めた。それでも止まない襲撃からの不安と不足する食糧の確保に生きるか死ぬかを選択させられた団は、

(注) 碑文の除幕式に配布された資料

